

CRASEED NEWS



No.42

発行：NPO法人 リハビリテーション医療推進機構 CRASEED / 年3回発行 / 第42号 (2019年9月14日発行)
〒560-0054大阪府豊中市桜の町3-11-1 関西リハビリテーション病院内 TEL:06-6857-9640 http://craseed.org

JARM2019 第56回日本リハビリテーション医学会学術集会を終えて

JARM2019は神戸コンベンションセンターで2019年6月12日(水)から16日(日)の5日間にわたって開催されました。おかげさまで約6,500人もの方々が参加され、好評かつ盛会のうちに終了することができました。大会長として、ご協力・ご参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。公式には各学会誌などにご報告いたしますので、本紙面では概要および他に記述されない感想などを述べたいと思います。

JARM2019の開催テーマは『最先端リハビリテーション医学の今とこれから』(Cutting-edge Trends of Rehabilitation Medicine)としました。このテーマに決めた理由は、2019年をロボットや先端機器の普及元年にしたかったことが第一に挙げられます。このままでは日本がロボット後進国になるという危機感から前面に出したテーマですが、危機を救うきっかけになったかどうかは今後の歴史が判断することになります。

しかし、実は、大会長として最も主張したかったことは、独自企画のプログラムに色濃く表れています。それは、機能評価、予後予測、ニューロリハビリテーション、

チーム医療、心理、QOLなどの最先端を参加者に知ってもらいたいということでした。具体的には、指定パネルとして演題募集した『上肢麻痺治療』、『障害受容再考』、『予後(帰結)予測』などのほか、大会長企画シンポジウムのうち分野間連携や療法士のキャリアパスに関するプログラムなどがそれにあたります。また、総計

180以上におよぶ特別講演や教育講演のうち、私が特に重要視して企画したプログラムのキーワードだけを挙げますと、先端機器、運動学習、神経科学、再生医療、在宅医療、芸術家医療、リスク管理、栄養管理、嚥下障害などです。これらは種々雑多なテーマに見えるかもしれませんが、会長講演で述べた3つの軸(知・情・意)それぞれに関わっていることが分かります。

さて、学術集会として公式ウェブサイトの立ち上げ、チラシなどの配布、そして学術誌での広報などは例年行なっていることですが、今回は情報発信としてSNSなどを駆使しました。Facebookやツイッターからの非公式情報発信はもちろん、Facebook広告とシェア、個人ツイッター

でのリツイートによる拡散、PT-OT-STネットでのインタビュー動画、リハノメチャンネルへの出演などです。それらで強調したキーワードは『すべてが学べるリハ医学会』や『学術の祭典』というもので、特に有資格者の著増により分科会開催となった理学療法士学会を意識して、多くの関連専門職の方々にとって、ここに集えばリハビリテーション医学全般を学べる場になる



JARM2019は盛況のうちに幕を閉じた

ことを目指しました。これらの情報発信が、充実したプログラムと相まって、参加者の増加につながったと考えています。

最後に、学術以外で大変満足だったことは、神戸スイーツ企画です。これは、展示場のブースに参加者が立ち寄る機会を増やすことを目的として、ブースごとで押しってもらう私の似顔絵のスタンプが一定数になったらスイーツを無料でもらえる企画です。毎日数百個のスイーツの提供は、ORIGINE KOBEという神戸を代表するパティシエグループに依頼しました。そのため、毎日勢ぞろいする超一流の神戸スイーツがネットや口コミで大評判となりました。参加者との交流が盛んになったと出展者からも好評でした。

以上のように学術集会の成功は、関与された皆様全員の貢献によるものですが、特にコメンターとして尽力いただいた皆様のお名前を記載して、ご報告に代えさせていただきます。本当にお疲れ様でした。

(兵庫医科大学 道免和久 先生)

JARM2019運営コメンター:

内山侑紀、勝谷将史、小山哲男、松本憲二、森脇美早、川上寿一、天野暁、木村幸恵、守谷秀子、橋本礼奈



道免和久大会長による会長講演では、参加者が熱心に耳を傾けた

JARM 2019

—第56回日本リハビリテーション医学会学術集会— 報告

国内外に多くの同志がいることを
肌で実感多大な刺激を受け、
明日からも心新たに!

兵庫県は神戸市、JR三ノ宮駅からポートライナーに乗り換え、車窓から紺碧の海を眺めながら電車で揺られること約15分。ポートアイランドに位置する神戸コンベンションセンターが今回の学会会場です。前半が国際学会のISPRM、後半が国内学会のJARMと、リハビリテーション医療分野における最大規模の学会がオーバーラップする形で開催されるのは非常に珍しい試みではないかと思えます。また、後半のJARMについては道免大会長の下、兵庫医科大学リハビリテーション科医局が学会運営を担うことになっており、私にとっては参加者と運営側の両方の立場で参加する初めての学会となり、色々な意味で印象深いものになりました。

まず参加者の視点では、入門講座から教育講演、症例発表に最先端の研究発表、さらにはハンズオンセミナー、ポスター発表、企業展示と、現在のリハビリテーション医療に関わるあらゆるプログラムが取り揃えられており、限られた時間で何に参加すべきか正直かなり迷いました。明日から使えそうな実践的知識を得られるものもあれば、最先端の知見に触れて未来に思いを馳せるような講演もあり、駆け出しのリハビリテーション科医として大変刺激を受けました。

数え上げればきりが無いほどさまざまなプログラムがありましたが、今回の報告

では同医局の金田先生が主催に関わった『若手リハビリテーション科医師の会』を取り上げたいと思います。こちらは比較的、年次の若いリハビリテーション科医が参加するプログラムで、ISPRMとJARMの合同プログラムであるため、参加者の半数は海外の若手リハビリテーション科医でした。お互いの国名当てクイズやケーキを食べながらの談笑、症例検討クイズなど、交流をメインとしたプログラム構成で、久しぶりの英語に四苦八苦しつつ、楽しく過ごさせていただきました。

リハビリテーション科は、日本ではまだまだ専門医の数も少なく、初期研修の頃に進路としてリハビリテーション科を考えていることを先輩医師に言ったところ、不思議そうな顔をされたり、中には「整形外科のこと?」と真顔で問い返してくる先生もいらっしゃいましたが、今回の学会やこちらのプログラムに参加したことで、国内のみならず国外に多くの同志がいることを肌で実感でき、個人的にとっても印象深いプログラムとなりました。

また、運営側の視点では、展示場のブース担当やスイーツのスタンブラリー、混雑時の列の整理などを手伝っていただきましたが、インカムでははっきりなしに連絡や確認事項が飛び交っており、これだけの規模の学会を運営することがいかに大変か、その一端を知ることができました。初期から準備されてきた幹部の先生方やサポートの方々の苦勞は、想像を絶するものだったと思います。参加者、運営者、両方の視点で大変貴重な経験をさせていた

だきました。怒涛の1週間はあっという間に過ぎ去り、熱気の余韻を残しつつ、明日から心新たに頑張ろうと思ひながら、私はポートアイランドを後にしたのでした。

(兵庫医科大学 橋本泰成 先生)

多様性が生み出す
エネルギーのうねり
既知のものを組み合わせ
新たな価値へ

いきなり私事で恐縮ですが、私は昨年まで精神科に所属しておりました。実は昨年日本精神神経学会が神戸開催だったこともあり、個人的には2年連続で同じ時期、同じ会場で違う学会に参加したことになります。そんなわけで何となくの場のイメージをもってJARM2019に臨みましたが、そこに一歩足を踏み入れた瞬間、なぜか想像していた以上に自然と気分が高揚するのを感じました。華やかな企業展示ブースの数々、(同時期にISPRMも開催されていたこともあり)各国のリハビリテーション医療に関わる人々の談笑する姿。一言でいえば、そこには、「多様性が生み出すエネルギーのうねり」のようなものを感じたのでした。

そして、そこで感じた「多様性のうねり」は日が経つにつれ収まるどころかさらに強くなっていきました。講演内容も「リハビリテーション」という軸が一本通っている以外は多岐にわたります。ロボット、バーチャルリアリティ、AI、地域包括ケア、在宅看取り、再生医療、パラリンピック、音楽演奏家の機能障害、嚥下スープ…本当に単一の学会なのだろうかと思ってしまうほどにバラエティ豊かなテーマが並び、5日間という長丁場でしたが最後まで全く飽きることなく参加できました。道免教授の会長講演でのお言葉で、「既知のものを組み合わせることでNew value creationを」とありましたが、当初感じた「多様性のうねり」はこの言葉に行きつくことで最後腹に落とすことがで



会長講演には大勢の参加者が詰めかけた



ロボット展示など、次世代の技術にまつわる展示・講演も数多く行われた

きました。すなわち、「リハビリテーションの世界とは多様なテーマが交差する、さながら“スクランブル交差点”のような場であり、であるからこそ既知の事が出合える機会も多く、次世代の医療や介護に新しい価値を創造していけるチャンスが大きい」のだと。その可能性の広がりを感じられたことが一番の収穫だったのかもしれない。

私はリハビリテーション医療の世界に足を踏み入れてまだ1年生ではありますが、将来、「リハビリテーション×イノベーション」の一端の、せめて端くれだけでも握ってられればなあと感じた次第です。また、今回の学会では大会運営スタッフとしても学会に関わることができました。一つの学会を完遂するまでに幾重にもシミュレーションを重ね、想定すべき事態に備え、幹部の皆様を先頭に、不眠不休で事に当たる姿を目の当たりにしました。正直、たいして役に立てなかったのですが、少しでもその運営に参加できたことは今後の私の人生にとってもとても貴重な糧となることでしょう。

参加者および運営側と学会の2つの側面を味わうことができたのは、とても幸運でした。道免教授をはじめ、医局の皆様方には、入局3ヵ月にして、このような貴重な機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。ありがとうございました!!

(兵庫医科大学 青柳潤 先生)

改めて教わった
「口から食べる」ことの大切さ
先生方の熱い思いと
体験談に感銘を受けた

JARM 2019は道免教授が大会長をされ、私にとって主催側としての初の学会参加。また、リハビリテーション学会への参加自体も初めてでしたので、非常に貴重な体験をさせていただきました。今回は、藤田医科大学 リハビリテーション科主催の第13回国際リハビリテーション医学会世界会議も並列・連続開催され、両学会の共通プログラムなどもあって見どころ満載でした。

療法士の未来を切り開く合同シンポジウムや、経済学者・森永卓郎先生の講演を聴講させていただきました。また、ワインチーズパーティーの開催や、スタンブラリー形式で、スタンプが3個たまる神戸スイーツを1つ無料でもらえるブースもありました。6日間で3,000個のケーキが用意されましたが、おいしいと話題になり、毎日15時頃にはなくなっていました。私はスタッフとしてスイーツの担当をさせていただきましたが、1日6個食べに来られた女性もいらっしゃいました。私は糖質制限ダイエット中で食べることはできなかったのですが、大好評でした。

学術講演もたくさんあり、イベントも充実しており、参加者としてどこに行こうか、何をしようか贅沢に悩んだ学会でした。最終日には「QOLを支えるリハビリテーション」をテーマにした市民公開講座が行われました。演題は、国際料理コンクール日本代表 メゾン・ド・タカ芦屋の料理長 高山英紀先生の「フランス料理人が作るどろみ剤を使用しない生きるための嚥下スープ」、社会福祉法人 日本介助犬協会 専務理事 高柳友子先生の「犬と共に元気になる!~

介助犬・動物介在療法とは~」、ホリスティックケアプロフェッショナルスクール学院長 相原由花先生の「臨床アロマセラピーの理論と実践」の全3講演でした。どの講演もとてもおもしろく、各先生の熱い思いや実際の体験談などをお聞きし、非常に感銘を受けました。

特に嚥下は、日々のリハビリテーション科医としての仕事にも大きく関わってきます。どろみ剤を用いることで誤嚥の危険性を抑えることはできますが、味が悪くなり嫌がる患者様も多くなります。しかし、この嚥下スープは、フランス料理のさまざまな技法を使うことにより、自然にとろみを出すことができたのです。これは、フランス料理の世界大会で5位入賞の経歴をお持ちであり世界最高峰の料理人である高山シェフと、美食家である道免教授をはじめとした兵庫医科大学研究チームの合同プロジェクトで、レストランにも出せるおいしさであり、かつ安全面でも優れているようです。実際に嚥下能力が低下し口から食事をしなくなった方たちや、末期がんにより食欲が落ちてしまい、食べることができなくなった方たちが、この嚥下スープだけはおいしそうに嬉しそうに飲んでくれたのです。

人の欲で最後まで残るのは食欲だと思えます。「菓で生かされているわけではなく、ちゃんとした食事で生かされているという食事の提案をしたい」という強い意志をお持ちである一流料理人から、口から食べる大切さを改めて教えていただきました。

最後になりますが、JARM 2019は主催者側としても、参加者としても非常に貴重な経験になりました。参加して下さった皆様、道免教授をはじめ医局の先生方、運営に関わって下さったすべての皆様、ありがとうございました。そしてお疲れ様でした。

(洛西シミス病院 金子昌憲 先生)



JARM2019会場である神戸コンベンションセンター



「若手リハビリテーション科医師の会」では、国内外の参加者が学びながら親睦を深めた



高山英紀シェフと兵庫医大リハビリテーション医学教室の共同プロジェクトであるブースでは、「幸せのスープ」がふるまわれ、好評を博した



展示ブースを訪れ、スタンプをためると食べられる神戸スイーツ企画は連日賑わった
スイーツスタンブラリー台紙。大会長の顔を模したスタンプが大人気

ISPRM2019

—第13回国際リハビリテーション医学会世界会議— 報告

熱気にあふれた
非常に刺激的な学会
この場に居続けられるよう
研鑽を続けたい

2019年6月9日(日)~13日(木)に開催された第13回国際リハビリテーション医学会世界会議 (ISPRM) に参加させていただきました。

Day0のWorkshopから各LectureやSession、後半のJARM合同企画など最

後まで魅力的なプログラムがいっぱいで、どれに参加しようか、常にプログラムとにらめっこして頭を悩ませる必要がありましたが、大会長の「活動」に対する思いが各所からひしひしと伝わってくる、熱気にあふれた非常に刺激的な学会でした。

ICFは日本語版のコアセットマニュアルが出た当時から医局では勉強会で取り上げて使ってみようとしていましたが、実際の症例では解釈に迷う場面もあり難しいという印象でした。今回ICFのLong

workshopでStucki先生の講義を受け、各国で同様の難しさを皆が感じていることや、日本版がそれでもかなり丁寧に作られていることを知り、ICFを社会全体として活かしていくためには、やはりまず私たちが使っていくことが大事だと感じました。

今回は3回目のISPRM参加でしたが、大学院生として海外講師のアテンドを担当させていただいたり、各国の参加者とSessionやNetworking eventで仲良くなり、さらに道免先生や内山先生をはじめ身近な先生が大舞台上で堂々と発表されているのを目の当たりにして、私自身も同じ場に居続けられるよう研鑽を続けなければならないと強く感じました。この経験を糧に、まずは私がリハビリテーション科医としてしっかり「活動」してまいります。

(兵庫医科大学 山崎亜希 先生)



JARM2019と同時に開催されたISPRM2019も大きな盛り上がりを見せた



Gerold Hans Stucki先生によるICFについての講義

学会運営を終えて

2019年6月12日(水)から16日(日)まで、第56回日本リハビリテーション医学会学術集会 (JARM2019) が神戸コンベンションセンターで開催され、兵庫医科大学リハビリテーション医学教室が主催 (大会長: 道免和久先生) しました。6月9日(日)から13日(木)まで第13回国際リハビリテーション医学会世界会議 (ISPRM2019) も同時開催という過去に例を見ない長期間で大規模な学会となりましたが、おかげさまでまもなく無事盛会のうちに終わることができました。

思えば、学会準備の開始は開催より1年半以上も前の2017年10月に遡ります。過去の主催校からの申し送りは多少あるものの、ほぼゼロに近い状態からのスタートでした。まずはプログラム関連の準備から始めましたが、今までにない斬新な講師陣を揃えたいという一心で、いつも夜遅くまで議論していたことが記憶に残っています。協賛に関しては、業界としてはすでに逆風の吹き荒れる中、大会長はじめ実行委員の大変な労力の元に、何とか今回の協賛企業を集めることができました。

リハビリテーション医学会の関連会合での調整も難航し、大幅な方針転換を強いられることも幾度となくありましたが、大会長のもと実行委員一丸となり、何とか当日まで乗り越えることができました。

いざ学会が始まってみると、これまでの参加側の立場とは全く異なり、運営側として会場数の多さとその展開の早さ、そして責任感に圧倒されました。また想定外なことや、わからないことの連続で、特に人員配置の面では急に必要な場面が多々あり、多くの学会運営スタッフの皆様には無理を申し上げ、本当にご迷惑をお掛けしてしまいました。しかしながら、スタッフの皆様のおたたかな心と現場での密な連携力や臨機応変な対応力に助けられ、大きなトラブルもなく学会最終日を迎えることができました。これもひとえにCRASEED allianceとして、病院の枠を越えて普段から密に連携をとっている私たちの努力の賜物ではないかと誇りに思っております。

最後に、大会長はじめ実行委員の皆様、本当に長い間お疲れ様でした。そして当日運営に携わっていただいた関連病院のスタッフの皆様、その間各病院の留守番を守っていただいた皆様に心より感謝を申し上げます。今回の経験で得ることのできた私たちの素晴らしい経験と新たな絆が、今後また新たに違う形となって生かされることを期待して、学会終了後のご挨拶とさせていただきます。と思います。

(兵庫医科大学 内山侑紀 先生)



学会運営に向け、熱く議論を重ねたプレ会議



想定外な出来事や困難が多かったが、皆が一丸となって大会を成功させた